子どもを授かったので、

幼馴染から逃げ出すことにしました

目次

子どもを授かったので、
幼馴染から逃げ出すことにしました 5

後日談 子どもを授かったあとも、
幼馴染が逃がしてはくれません 231

子どもを授かったので、
幼馴染から逃げ出すことにしました

第一章 かけがえのない思い出

『イザベラというの？ 良かったらついてこない？』

寒空の下、地面にうずくまっていた孤児の私に向かつて、綺麗な手を差し伸べてくれた天使。それが三歳年上の主——ウィリアム・ブルーム様の第一印象だった。

少年少女の頃のこと。

彼のことを幼馴染と呼ぶと失礼に値するかもしれない。

あの日をきっかけに私——イザベラは、帝国の帝都に居を構えるブルーム伯爵家の住み込みのメイドとして働くことになった。

そして、ほとんどの時間を、伯爵家の嫡男であるウィリアム様と一緒に過ごした。

金糸のごときプラチナプロンドの髪に、サファイアを彷彿とさせる碧眼、天使のような愛らしい容姿。

それに、他者を惑わす魅了の微笑み。

老若男女問わず優しく、非常に穏やかな少年として名を馳せていた。

だけど、どうしてか、彼は私の前だけでワガママになる。

「ああ、皆、イザベラとふたりにしてくれるかな？」

たくさんの使用人たちと一緒にいるとき、必ず彼は私だけを指名してくる。そうして、ふたりきりになると、様々なことを命じてくるのだ。

「おい、イザベラ、なんで俺のあとをついてこないんだ、早くしろ」

「おい、イザベラ、その仕事は良いから、俺の世話に戻れと言ったはずだ」

「おい、イザベラ、そんなことはお前がやらなくて良いと何度言えば分かるんだ」
主である伯爵家の長男の言うことは聞かないといけない。私に拒否権はなかった。

しかも、彼が碎けた口調になるのは、皆が見ていないところだけだ。

私が彼に色々と命じられていると他の人に言ったところで、おそろく誰も信じてはくれないだろう。

……とはいえその命令は、小さい子どもがワガママを言っているようなものだから、苦になることはない。

それに、ウィリアム様と呼びつけてくるのは、他の使用人たちが嫌がらせとして私に仕事を押しつけようとするときばかりだった。

また時々、彼は儀式めいた行動で私に暗示をかけてきていた。

「おい、イザベラ」

私の身体が一度ピクリと動く。

すると、彼が私の髪を柔らかく掴む。それと同時に、心臓まで鷺掴みにされたような気持ちになる。

香水だろうか、年上の彼からは爽やかな海の香りがした。

「他の男と喋ったりしてないだろうな？ とにかく男に話しかけたらダメだ……」

「め、命令でしょうか？」

そう言ってくる彼の瞳は、懇願してくる犬のようだった。

「そうだ、命令だ」

「は、はい。それなら」

私が同意すると、彼はひどく安堵した表情を浮かべる。

「そうか、なら、それで良い。とにかく、俺以外の男はダメだから！」

彼は顔を真っ赤にしながらか、そっぽを向いた。

……どうしたのかしら？

彼に言われるがまま、仕事以外では極力、他の男の使用人たちとは口をきかないようにしていた。

そんな毎日が続き、いつしか私は思春期を迎えていた。

ウィリアム様も、少年と青年の狭間ぐらいの美少年に成長している。

しかし、小さい子どものような彼のワガママは、まだ続いていた。

大人になりきれないウィリアム様のことを、嫌だと跳ねのける女性は多いだろう。

だけど、拾ってもらったこと以外に、私には彼をどうしても嫌いになれない事情があった。

「イザベラ、やはりお前は頭は悪くないようだな。ほら、この本をやるから」

「あ、ありがとうございます」

彼はそう言って、私にこっそりと読み書きを教えてくれたのだ。

そうして、本人曰く読み古したらしい、綺麗な装丁の本をプレゼントしてくれる。

現在、中流階級の初等教育の義務化が国を挙げて進められてはいるらしいが、学校に通うには多くのお金がかかると聞いた。労働者階級にはまだまだ厳しい現状だ。本も高価であり、なかなか手が出せるものではない。

勉強をしたり本を読んだりすることが出来るなど、元孤児の私は夢にも思っていなかった。

「俺は俺と対等に話せる人間が欲しいんだ。ほら、お前も知ってるだろう？俺は他の者たちとは

違って、すぐに何でも出来るからな」

「そうですか……」

彼はそう言うが、素晴らしい貴族になるために、ウィリアム様が血の滲むような努力をしているのを知っていた。

優しくて努力家な彼の性格を知っていたからこそ、嫌いにはなれなかった。

「ああ、ほら、イザベラ。使用人の仕事のせいで、手が荒れてるぞ。友人に訊いたら、この香油が効くそうだから買ってきたぞ」

ころんと銀のケースに入った香油を渡された。

中からは甘い薔薇の香りがする。

…孤児だった私が抱いて良い感情ではないわ。

ウィリアム様の優しさに触れるたび、自分の胸の内に芽生えそうな何かを必死に打ち消した。

「俺が父の跡をついで、この伯爵家の主になったら、お前に楽をさせてやる」

彼はそんなことを、ふふんと告げてくる。

「ふふ、ありがとうございます」

こんなワガママな主人に振り回される日々がこれからもずっと続くのだろう。

ウィリアム様に拾われてからは、毎日がキラキラとした宝箱のように輝き、幸せだと感じていたのだ。

そう思っていた私は、まだ子どもだった。

第二章 果たされなかった約束と禁断の一夜

ふたりとも思春期を過ぎた。

私は少しだけ丸みを帯びて女性らしい身体つきになったと思う。

一方、ウィリアム様は、甘いマスクの精悍な青年へと成長した。

金糸のようなプラチナブロンドの髪に、サファイアを彷彿とさせる蒼い瞳は昔から変わることなく輝き続けている。金髪碧眼の者はこの国の中にも多くいるが、彼ほど煌めいた美貌を持つ青年は少ないだろう。

しかも、彼が優れているのは容姿だけではなかった。

紳士としての人格を高め、教養を学ぶためのパブリック・スクールでも、優秀な成績を修めた科目がいくつもあるそうだ。文武両道でなければ、スクールでそのような成績を残すことは出来ないで、様々なことに長けていると言える。

今やウィリアム様は、貴族の令嬢たちからも注目を浴びる、一目置かれた存在。

なんだか遠い存在になってしまったようで、私は一抹の寂しさを感じていた。けれども、変わらないところはいくつかあった。

「やっぱり、イザベラが作るオムレットが一番うまい」

彼はそう言つて、ふわふわの卵料理を好んで食べていた。

……大人になつても、変わらないところもあるのね。

変わったところ、変わらないところ。

彼の変化を見つけてのを楽しんでいた。

あるとき、彼の部屋でコートを受け取っている最中のこと。

「おい、イザベラ」

「は、はい、なんでしようか、ウイリアム様」

「卒業式で、最優秀賞が発表されるのを知っているか？ 学業で一番優秀な成績を修めた生徒が選ばれる賞なのだが……。もし最優秀賞を得ることが出来たなら、父上が俺の望みを何でも叶えてくれると言っていたんだ」

彼は白いワイシャツに巻いた蒼いタイを緩めながら告げてくる。

「何でもとは、伯爵様は大きく出られたものですね」

「そうだろう？ 父上も大きく出たものだが……」

そう言つて、彼は長い指を、私の頬ほほに添わせた。

……最近、こうやって、触れられることが多いような？

気のせいかもしれないが、距離が近くてなんだか気恥ずかしい。

心臓がバクバクと音を立ててうるさくてしょうがない。自分の頬ほほが赤らむのも感じて、ますます

恥ずかしくなってしまう。

「イザベラ、俺は何を望むと思う？」

「え？」

ウイリアム様の趣味に思いを馳せてみる。

「優秀な馬や、馬術の道具でしょうか？」

「そんなの、今飼つてる愛馬がいるから、他には欲しくないよ」

「だったら、チェス盤？」

「そんなもの、もう持つてるよ。なんでさっきのよりも安いものになつてるの？ まあ、俺が欲しいものは、お金で買えるものではないが」

……お金で買えないもの？ だとすれば、いったいなんだというのだろうか？

考えていると、彼がぼつりと何かを「呟く」。

「……ああ、俺の欲しいものは、鈍くて仕方がないな」

それはあまりに小さな囁きだったので、ウイリアム様が何を言ったのかが分からず、私は聞き返そうとする。

すると突然、彼の顔がゆつくりと私に近づいてきて――

「っ！」

柔らかな彼の唇が、私の唇の端に触れた。

海を連想させる香りが、ほのかに鼻腔びじょうをついてくる。

しばらく触れたあと、唇はそつと離れた。

「さすがに、ここまでしたら気づくかな。俺が何を欲しいのか……」

先ほどの倍以上、鼓動が高鳴る。

……そ、そんな、いや、でも、まさか、あり得ない。

一瞬の思いがけない出来事に、パニックになってしまい、うまく声が出せない。

「この俺に、ここまでさせるんだから、うぬぼれても良いよ。イザベラ」

私は自分の顔が絶対に林檎よりも赤くなっている自信があった。

「今度、はつきり言うから。そうだな……卒業式の翌日はどうだろうか？ 屋敷の中にある薔薇園に来てくれ。絶対に最優秀賞だからさ」

彼にそう言われ、こくこくと私は頷く。

そうして数日後には、ウィリアム様は予言通り、パブリック・スクールを最も優秀な成績で卒業することになった。

その翌日、彼に呼び出された薔薇園へと私は足を運ぶ。

薔薇の甘やかな香りが、仕事で疲れた身体を包み込んできた。

「もうすぐ、約束の時間ね。ウィリアム様に、どういう顔で会えば良いのかしら」

胸の鼓動が速まるのを感じながら、そつと呟く。

今日は、以前に彼がこっそりくれたツーピースドレスを身にまとっている。白いブラウスに、紺色の上品なスカートが合わせられたものだ。あまり化粧が得意ではないので、淡い桜色の口紅だけ

をつけて待つ。

……ウィリアム様に少しでも可愛いと思われたい。

胸に手を当てて、彼のことを考える。

うぬぼれて良いと言ってくれたウィリアム様。

孤児だった私を拾ってくれた美少年から、大人になった主人。

言い方がきついたりところもあるが、本質的には優しい彼。私の前でだけ砕けた口調だったのは、彼が自分に心を開いていたからなのだと思うと、今までの多くのワガママたちもいよいよ可愛く感じられた。

私に嫌がらせをしてくる使用人たちから、かばうようにして現れるウィリアム様。

対等に話せる人が欲しいと言って、読み書きを教えてくださいました。

皆が懂れる、そんな素敵な彼が自分を特別視しているなんて、まるで夢のような出来事だ。

それこそ、彼にもらった童話の本の中のお姫様になれたようで、今この瞬間、この世で一番幸せなのは自分だと言い切れる自信さえある。

だけど約束の時間になっても、彼はなかなか姿を現さない。

「どうしたのかしら？ でも、ウィリアム様はきちんとした方だから、絶対に来るわ」

自分自身にそう言い聞かせ、気持ちを落ち着かせる。

しかしいつまで経っても、彼は約束の場には来なかった。

あれだけ高揚していた気分も今や、不安へと変わりかけている。

……何かあったのかしら？

普段から時間や約束をきちんと守る彼の身に、何かあったのではないかと心配でたまらない。昼に約束をしていたはずなのに、もう陽が傾きつつある。

そうしていると、夕立ちが降りはじめた。

……雨も降ってきたし、屋敷に帰って、ウイリアム様が無事かどうか確かめなきゃ。

そう思い、私が駆け出そうとしたとき。

「イザベラ」

ウイリアム様の代わりに現れたのは、女性使用人の統括者である家政婦長バーバラ様だった。ブルーム伯爵家に長く勤める使用人のひとりだ。

眼鏡をかけ、厳しい表情の彼女は淡々と告げてくる。

「ウイリアム様は、急用でこちらには来られないそうです」

「そう……ですか……」

バーバラ様は、それだけ言い、去っていく。

少しだけ切ない気持ちになりながら、傘のない私は小走りで帰路についたのだった。

急用ならどうしようもないわ。

……仕方がない。

そう自分に言い聞かせながら走る私は、雨で出来た泥濘ぬかるみに脚を取られて転んでしまった。

ウイリアム様に会うために着ていたツーピースドレスが、泥にまみれて汚れてしまう。

せっかくウイリアム様にいただいた服が……

紺色のスカートだけではなく、白いブラウスにまで泥は撥ねている。

……大丈夫、洗えばまた、元の綺麗なドレスに戻るわ。

そう自分を奮い立たせながら、いつも以上に長く感じる屋敷までの道を歩いた。

そうして、屋敷の玄関が見えてきた頃。

荘厳そうげんな扉の前に、傘を差すひとりの長身ちようしん瘦躯しゆうこの男性の姿が目に入った。

金糸きんいとのようなプラチナブロンドの髪に、サファイアのように美しき瞳を持った甘いマスクの青年。

「あ……ウイリアム様……」

会いたかった人物が目の前に現れ、重かった足取りが少しだけ軽くなったような気がしてくる。

彼は、一台の見慣れない豪華な馬車の方へと移動する。

バーバラ様が言っていた急用が済んで、客人を見送ろうとしているのだろうか。

邪魔をしてはいけないと分かっている。

しかし、彼が客を送ったあと、すぐにでも話しかけたい気持ちが強かった。

声をかけようと少しだけ馬車に近づいた私が目にしたのは――

「……っ」

――同じ傘の下、麗しき青年が、美しい貴族令嬢と談笑している姿だったのだ。

ウイリアム様が傘を差してあげているのは、滑らかな流線を描く黒髪を持った綺麗な女性。

「あ……」

彼女は、私が着ているドレスとよく似たドレスを身にまどっていた。

汚れひとつない清らかな姿の令嬢と、泥にまみれた自分。

無意識に比べてしまい、なんだか悲しい気持ちになる。

「急用で来られないと聞いたけれど、彼は私との約束よりも優先したかったことがあったのね。……彼女と会う方が大切だった？」

結局、からかわれたということだろうか？ 期待した私がバカだった？

いいえ、きつと突然の来客で仕方なく……そうよ、急用だったそうだから。

けれどもウィリアム様は、見知らぬ令嬢に天使のような笑みを見せているではないか。

……親戚の女性かもしれないじゃない。

心を守るために、必死に自分に言い聞かせる。

そのとき、同じ傘の中を歩いていた令嬢が躓いた。

そんな彼女をウィリアム様は逞しい腕で抱き寄せる。

「ウィリアム……様」

思わず名前を呼んでしまうが、この距離では彼の耳に届かない。

先ほどひとりで転んだことを思い出した。

「私も彼女のように、ウィリアム様に支えてもらえていたら……」

胸が軋んで仕方がない。

どンドン、どンドン惨めな気持ちになっていった。

足元がふらつき、目頭に熱い何かがこみあげてくる。

胸をかきむしりたくなるぐらい、苦しい。

「お似合いだよな。ウィリアム様とアイリーン侯爵令嬢」

そう言っ、立ち尽くす私に、若い執事見習いのジョンが傘を差し出してきた。

彼のひとことが、瓦解しそうな心を鋭く抉る。

所詮、使用人の自分などでは手の届かない存在だと思い知らされる。

「ウィリアム……様……」

ふたりの仲睦まじい様子を見たくなくて、視線を逸らしてしまう。

そんな私の様子に気づくことなく、ジョンは話しかけてくる。

「ああ、そうだ、イザベラ。実は、ウィリアム様とアイリーン侯爵令嬢だけどき、今度、婚約するらしいよ。身分の高い侯爵令嬢を娶ることが出来るなんて、さすがウィリアム様だよな。いつあの美人なアイリーン様を口説き落としたんだろうな」

そう言っ、彼は笑う。

その瞬間、私は目の前が真っ暗になった。

——伯爵家の嫡男であるウィリアム様と、侯爵令嬢であるアイリーン様の縁談話が進んでいることを、執事見習いの口から知らされたのだ。

約束が果たされなかった翌朝、一通の手紙が届いた。

手紙の主はウィリアム様で、グラジオラスの押し花のしおりが封入されていた。

いつもの自分なら、花言葉の意味を調べていたかもしれないが、そんな気分にはなれなかった。白い便箋にはひとことだけ、こう書かれていた。

『約束の場所に行けずすまない。全てが片付いたら、また』

彼の手紙には、アイリーン侯爵令嬢との縁談話についての詳細は書かれていない。

……仕方ないわ。貴族同士の約束を優先しないといけなかっただけよ。ウィリアム様には立場があるもの。それに縁談のことだって、使用人たちが色々と言っているだけかもしれないし……彼の口からアイリーン様を好きだと聞いたわけじゃないもの。

現状を必死に否認しながら、自分の心を持ち直そうと必死だった。

だが、手紙を持った手は小刻みに震えている。鏡にちらりと映った自分は、ひどく白い顔をしていた。

そうして、釈然としない気持ちを抱えたまま、忙しいウィリアム様とは会えずに数日が過ぎてしまった。

ある宵の頃。

「皆、イザベラとふたりにしてくれるかな？」

ウィリアム様が天使のような笑みを浮かべながら、使用人たちと一緒にいる私を呼び出す。

どこかからの帰りなのだろう。彼はキャメルのオーバーフロックコートを身にとっていた。

……ウィリアム様に会うのは、すごく久しぶりだわ。

彼と呼ばれて嬉しい反面、胸中はひどく複雑だった。

私の前を歩くウィリアム様の、成長して逞しくなった背をぼんやりと見つめる。

彼に訊きたいことはたくさんあった。

ふと、彼と縁談の話が進んでいるというアイリーン侯爵令嬢の美しい顔が浮かぶ。

皆が言うように、ウィリアム様は彼女のが好きなのだろうか？

思い出すと胸がざわついた。

考え事をしているうちに、いつの間にかウィリアム様の部屋へと辿り着く。

室内は几帳面に整えられている。コートを脱ぎ猫脚の机の上に載せると、豪華なベッドに彼は座り込んだ。

「おい、イザベラ、俺のところに来るんだ」

幼少期からの癖で反射的に、命じられるがまま彼の元へと向かう。

座る彼のそばに近づいた瞬間、ウィリアム様が私の手を握る。帰宅したばかりだからか、その手は少しだけひんやりと冷たい。

「ウィリアム様」

「この間は悪かった、約束の場所に行けず」

いつも意地悪な言い回しばかりするウィリアム様だが、珍しく素直に謝ってきて、私は少し驚いてしまう。

そうして絶るような瞳で、私を見上げてきた。

「だけど、イザベラ。あれだけ、男と話すなって俺は命じていたのに……あの約束の日に、執事見習いの男の傘の中で、何を話していたんだ？」

「え？ それは、雨が降っていて、たまたま、話を」

「いったい、何を話していたんだ？」

ウィリアム様に尋ねられるが、私は言い淀んでしまう。

アイリーン様との縁談のことを聴いたと伝えれば、彼はどんな反応をするだろうか。

だが彼の口から直接、アイリーン様との縁談話を聞くのは正直怖い。

何も言えない私の態度を見て、ウィリアム様は眉をひそめながら告げる。

「俺に話せない内容なのは分かった。イザベラにとっては、所詮、俺の命令なんて、大したものではないんだ」

彼は俯いた。

「いや、約束を破るような俺が、イザベラを責めることは出来ない。このままだと努力が全部水の泡だと思っていたけれど、そもそも、イザベラの気持ち……俺には……」

「ウィリアム様？」

ぽつりぽつりと、先日からの出来事について、ウィリアム様が話しはじめた。

「言い訳がましいかもしれないが、アイリーン嬢の生家であるテイラー侯爵家が、突然、パブリック・スクールを卒業したばかりの俺に縁談話を持ちかけてきたんだ。しかも、件の日には、事前の

連絡もなしに現れたんだ」

彼は苦虫を噛み潰したような表情を浮かべている。

「上位貴族の申し出を無下には出来なかった。だが、俺としては、愛のない結婚はしたくない。だから、断ろうとしているのに、なかなか侯爵家が引き下がってくれない」

伯爵家よりも身分の高い侯爵家から持ち掛けられた縁談話であるため、下手な理由では断れずに、ウィリアム様は神経をすり減らしてしまっているようだ。

「今日も具合が悪いからとか言っつて、アイリーン嬢は俺に会うのを拒んできた。なんとか令嬢の機嫌をとって破談にしたいというのに、テイラー侯爵は娘との結婚を推すばかりだ」

私が何も言わないでいると、彼の声音がひどく沈鬱なものになる。

「イザベラ。この縁談話は、お前にも関わる話だと俺は思っている」

「わ、私にですか？」

突然、自分にも関係があると言われて、心臓がドキンと跳ねた。どうしても心のどこかで、彼は自分のことを好いているのではないかと期待してしまう。

だが、彼の答えは、私の心をひどく痛めつけた。

「そうだ。もし俺がこの縁談話を断れなかつたら、将来お前がアイリーン嬢の世話をしないといけなくなるんだからな」

そう言っつて、彼は私から視線を逸らす。

『縁談話を断れなかつたら、俺とイザベラは結ばれなくなる』

そんな都合の良い言葉を私は求めていたのだ。

……やっぱり、ウィリアム様にとつて、私は使用人でしかないんだわ。悲しくて泣きそうになるが我慢する。

彼に握られた手が、悲しさをより一層強くさせた。こういう彼の所作も、私が特別な存在だからしているのではないのだろう。

……そもそも、ウィリアム様は、私以外には愛想が良い方だもの。

……きつと、使用人に気安く触れている感覚なのよ。

そう思い悩んでいると、ウィリアム様が問いかけてくる。

「イザベラ。お前は、俺とアイリーン嬢が婚約したら、どう思うんだ？」

胸がぎゅつと苦しくなる。

だが自分の気持ちを落ち着かせながら、私は努めて冷静な返しをすることに決めた。

「もし、アイリーン様とウィリアム様の婚約が成立したら、一生懸命アイリーン様に仕えさせていただきますたく思っています。私はブルーム伯爵家に仕える使用人ですから。良くしてくださいる主人の奥様になる方なので、誠心誠意お仕えするだけです」

そう答えると、ウィリアム様は蒼い瞳を見開き、自嘲気味に呟いた。

「お前から、そんな答えが聞きたかつたんじゃない。イザベラからしたら、俺とお前は主と使用人でしかないか」

少しだけ陰りを帯びた瞳で彼は続ける。

「おい、イザベラ」

彼はいつもよりも暗い調子で私を呼んだ。

「お前にしか出来ないことだ」

「え？ ……きゃっ！」

突然、彼に腕を掴まれ、身体を引き寄せられた。

「んっ……」

気づけば、彼の膝の上に乗っていた。彼の唇が私のそれを塞いでくる。

「ウィリアム様っ……あっ……」

うなじを押さえつけられ、口の中に彼の舌がねじ込まれ、しばらくなすがままになる。

ひとしきり、くちゅくちゅと唇を弄ばれたあと、彼の柔らかな唇が離れた。

そうして彼はタイを緩めながら、私に告げる。

「昔から抱いていた願いが叶いそうにない。俺を慰めてくれないか？」

彼の切望するような声が、胸を穿つ。

海を連想させる爽やかな彼の香水が、鼻腔をついた。

「私が、ウィリアム様を慰める……？」

——結局、彼の願いが何かは分からないまま、とざりと、私はベッドの上に組敷かれていた。目まぐるしい状況の変化についていけない。

身体の上に何か重みを感じる。どうやらウィリアム様のようだった。

子どもの頃の取っ組み合いとは違う。大人の男性が身体の上に乗ってきたのは生まれて初めてで、全身が強張ってしまう。

「そうだ、お前の身体で、俺を慰めろ。お前にしか出来ない役割だ」

「私にしか出来ない……？」

今まで、彼からそんな慰め方をしろと言われたことはなかった。

シャンデリアの逆光で、ウィリアム様の表情が分ならず漠然とした不安が広がる。

けれども、同時に「私にしか出来ない」という言葉に、おかしな期待をしてしまう自分がいた。

「ウィリアム……様っ……んっ……」

私の唇に、また彼の唇が押しつけられる。

子どもの頃に交わした頬にするキスとは明らかに違う、大人の深い口づけ。舌が絡み合っては離れ、何度も口づけられる。

「あっ……ウィリアム様っ……どうして……？」

私が言いかけたのを聞いて、一旦ウィリアム様は顔を離れた。

「……願いが叶わないぐらいで落ち込んでいる、そんな情けなくて格好悪い姿を、他のやつらに見せることは出来ないだろう？」

彼の縄のような瞳を見て、困惑は深まる。

激しい口づけで、頬が火照りきったまま、私は唇をきゅっと噛み締めた。

「イザベラなら、幼い頃から俺のことを知っている……理由は……それだけだ」

彼は視線をふいと逸らす。

彼の言葉は私の心を抉った。

……他の人には情けないところを見せられなくて、他に頼める人がいないから私が選ばれた？
やはり、単に都合が良いだけなのだろうか。

彼にとつて自分は特別な存在ではないかと思いついて知らされて、打ちひしがれてしまう。

「でも、ウィリアム様なら引く手数多ですし、わざわざ使用人に手を付けずとも——」

「言ったはずだ、お前にしか出来ない」と

私の言葉を遮り、強い口調で彼が告げる。

「そうですが、私は簡単に異性に身体を委ねたくはありません」

自分が孤児だったからこそ、特にそう思うのだ。

一瞬の快樂に溺れ、その結果生まれた子どもを育てきれなかったがゆえに、両親は私を手放したのだらう。

夫でもない人物に身を任せるなど、危険性が高すぎる。

「だったら、一晚だけ、俺の恋人になれ」

そう言いながら、緩めたタイを捨て、彼が前開きの上着を放った。

なんて甘美な誘惑だろうか。

——一晚だけでも好きな人の恋人になれるなんて。

彼の逞しく育った胸板、均整のとれた引き締まった体躯が目に入る。

私の頭の中では、危険だと警笛が鳴っている。ただ、本能的に彼に身体を任せてしまいたいと思っっている自分が、心のどこかに存在した。……ウイリアム様に縁談話はあるけれど、決定事項ではない。まだお互いにパートナーがいらない状態だもの。

一晩限りの恋人になるために都合の良い解釈をして、自分を納得させようとする。そんな気持ちとは裏腹に、ダメだ、ダメだ、危険だ、と頭の中でもうひとりの自分が何度も警告してきていた。

それでも、私は悪魔の囁きに負けてしまう。

「それは……命令でしょうか……？」

子どもの頃、『他の男と話すな』と言ってきた彼に問いかけた言葉が口について出た。自分でも卑怯だとは思った。馬鹿な女だとも。

でも、どうしても私はウイリアム様と……

少しだけ目頭が熱くなる。

愛する人に一度だけでも抱かれたいと思うのは罪だろうか？

「そうだ、命令だ」

ウイリアム様は続ける。

「イザベラ。使用人なら、主の命令は絶対だろう？ お前が俺の使用人だと言い張るなら、言うことを聞くんのだ」

言い方こそ命令調だが、彼の口調はどことなく苦しそうに聞こえる。

「……はい。命令なら。孤児だった私を拾っていただいた恩義がありますから」

私は伏し目がちに、ゆっくりと返す。

しばし、ふたりの間に沈黙が流れる。

「……そうだ。俺に恩を返すと思え……」

ウイリアム様が自虐的に笑った。泣きそうな子どものように見えて、胸がざわつく。

……どうしてそんなに寂しい表情をしているの？

彼の大きな手が服に伸びてきた。

「想像していた以上に、大人びた身体になってしまっているな……」

衣服越しに、彼の綺麗で長い指が胸の膨らみに沈み込む。ゆっくりと変形させられ、唇から声が漏れ出た。

「あつ、は、あ……」

メイド服の白いエプロンが乱れる。

いつの間にか黒いワンピースの裾から、彼の大きな手が侵入していて、脚を撫でていた。

「俺以外の男に触れさせたりはしていないだろうな？」

「……っ……そんなこと……あるはずが……」

ひどく優しい愛撫が続き、彼が私のことを愛しているのではないかと錯覚してしまいそうになる。

「あつ……ウイリアム様っ……」

「イザベラ……ああ、お前が誰のものでもないことは分かっている……」
熱に浮かされたかのように、彼に名前を呼ばれ、胸が疼く。

穿いていた下着を、彼が引きずりおろした。そのまま足首まで一気に下げられ、ベッドの上に放り捨てられる。

「おい、イザベラ……脚を開け」

「ウィリアム様……」

命じられるがままに、条件反射で両脚を開いてしまう。

脚の間に、硬い何かがぬるりと触れてくる。

……私は夢を見ているの？

これから本当に彼によって身体を開かれるのだろうか？

くちゅりくちゅりと淫靡な水音が鳴った。

「ウィリアム様……これ以上は……今ならまだ……」

——引き返せる。

「もうお前の頼みを聞いてやることは出来ない……潔く、覚悟を決めろ……イザベラ……」

だが獣のような彼の器官は、もう引き返せないほどに荒ぶり昂っていた。

恐怖と快楽の両方が首をもたげてくる。

けれども、明らかに快楽が強かった。ずっと恋い焦がれていた相手と、互いの秘めたる場所を触れ合わせる幸せの方が勝っている。

「イザベラ。俺はずっと……。今だけで良い、俺のことだけ見てはくれないか。……なあ、イザベラ……」

「ウィリアム様……私は、ずっと、あなたを……」

彼がひどく愛おしそうに私の名を呼んでくる。

互いの視線が絡み合った。

呼吸が浅く、鼓動が高鳴っていく。

それ以上は、何も考えられない。

ぬるぬると脚の間で動いていた先端が狭穴を一気に穿ってきた。彼の欲棒が純潔の壁をみちみちと破って進んできて、いまだかつて感じたことのない熱と重量を下腹部に感じる。

「ああっ……！」

純潔を失うときはひどく痛むらしいが、あまりにも彼が何度も私の名を口にするものだから、痛みよりもそちらに意識が向かった。

「イザベラ、痛くはないか……？」

心配そうな声で、彼が髪を撫でてくる。

あまりに優しく、胸がぎゅつと苦しくなった。

「ああ……イザベラ……今は、今だけは、俺の……」

そうして、いつになく熱っぽい口調で彼が私の名を呼ぶ。

圧迫された隘路の中、くちゅんぐちゅんと熱塊が出たり入ったりを繰り返す。

突き動かされる激しさに耐えるために、彼の広い背中に両手を回した。

「イザベラ……イザベラ……」

「あつ、あつ、はつ、あ……」

目に涙が浮かんで視界がぼやける。

身体を揺らし、私の中に入りを繰り返す青年は、熱に浮かされたまま、愛する女性を呼ぶかのようにならぬ名前を繰り返していた。

どうしてこんなにも、ウイリアム様は優しく名を呼ぶの？

一晩だけの恋人扱いだからだろうか？

これからもずっと大事にしてくれると、錯覚してしまいそうならいに彼が甘い声で囁く。勘違いしたらダメだと分かっている。

だが、今このときだけは、彼に愛されていると思っていたい。

「あつ、ん、ウイリアム様……！」

「イザベラ……イザベラ……」

かねてから望んでいたかのように、快感が駆け巡る。

破瓜の痛み以上に、彼と身体をひとつにしていることへの幸せの方が強かった。

じわりと汗の滲む彼の首に腕を回す。

硬い漲りを膣道に抽送され続けていると、両太ももに温かいもの——血液や愛液や精だろう——が流れていくのを感じた。

「あつ、あつ、ウイリアム様……」

「イザベラ……」

彼の愛撫が優しすぎて、頭が蕩けてしまいそうだ。

汗ばんだ肌同士がぶつかり合い、ぱちゅんぱちゅんと淫らな音を鳴らした。

離れたくない気持ちを表現するかのようにならぬ剛直を私の肉壁がぎゅうっと締めつける。

「あつ、ウイリアム様……」

ギシギシとベッドが軋む音と淫らな水音が間断なく続く。

彼が腰を揺らすたびに、プラチナブロードの髪がさやさやと揺れた。

熱情を孕んだ蒼い瞳に視線を絡め取られる。

めったに汗をかかない彼の額に、珠のような汗が滲んでいた。

「イザベラ……俺の……名前を……っ……っ……呼んではくれないか？」

「ウイリアム様……あつ……あん……あつ……あつ……」

命じられるがままに名を呼び返すと、揺さぶりが激しくなる。

彼の広い背にしがみつくのには必死だった。

まるで獣の交合かのように激しく揺れ動くふたりの影が遠くに映る。

相手の身体がぶつかってくるたびに、引いては寄せる波のように快感が襲ってくる。

膣内で欲棒が命脈を宿しはじめ、私の頭の中も明滅した。

彼がぶるつと身体を震わせたと同時に、かつてない快感が全身を走り抜ける。

「ああっ——！」

お腹の奥が一気に熱を帯びる。彼に精を放たれたのだと気づくのに、少しだけ時間がかかった。「イザベラ……これで……お前の全ては、俺の……」
荒い呼吸を整えながら、彼が私の髪を撫でてくる。

「ウィリアム様」

今だけで良い。彼を独占出来ている今だけで良いから、ウィリアム様に求められて、恋人になった気分浸りたかった。

「ウィリアム様。……キス、してもらえませんか？」

まだ少し呼吸の速い彼は、何も答えてはくれない。

断わられるだろうかと不安になったが、次の瞬間、彼はひどく甘くて優しい口づけを落としてきた。

「イザベラ、俺に純潔を捧げてくれてありがとう」

涙が滲んで、彼の綺麗な顔がぼやけてくる。

愛しいウィリアム様が本気じゃなかったとしても、それでも私にとっては怖いくらい幸せな思い出になった。

「たとえ、俺の願いが叶わなかったとしても、絶対に今このことを忘れない」

涙で彼の表情が分からなかった。

お互い、身につけていた衣服を脱ぎ捨て、生まれたままの姿になる。

室内に熱気がこもり、再び荒い息遣いと水音が支配しはじめた。

そうして純潔を失ったその日は、痛みを忘れ、理性を捨てて、彼に身体を委ね続けたのだった。

——ウィリアム様に一晩中愛され続けた。

彼と私は夜が明ける前についたのだが、空が白みはじめる前に、私はいつもの習性で目を覚ました。

プラチナブロンドの髪の端整な顔立ちが目に入る。

海を連想させる爽やかな香りが鼻腔をついた。

どうやら彼は、私の頭を腕枕しながら、すやすやと眠っているようだ。

耳もとに、狩猟や騎馬で鍛え抜かれた二の腕を感じ、昨日の情熱的な一夜が思い出される。

ふたりとも生まれたままの姿で、秘する場所はまだまだ繋がったままだった。下半身に残る違和感と鈍い痛みが、昨晩の出来事が真実だったと突き付けてくる。

……あ、まだ私、ウィリアム様と繋がって……

頬が紅潮したのが自分でも分かった。

言いようのない幸福感とともに、胸を締めつけるような罪悪感が湧いてくる。

本当はずっと、ウィリアム様の寝顔を見ていたい。

だけど、使用人でしかない私に、そんなことは許されていない。

身をよじり、彼の身体から抜け出そうとすると——

「イザベラ……」

名を呼ばれ、彼の腕に引き寄せられた。強い力で抱きしめられ、遅く育った胸板が当たり、心臓が弾けそうなくらいに高鳴ってしまう。ウィリアム様が目を覚ましたのかと思ったが、どうやら寝惚けているようだった。このまま夜が続いてくれさえすれば、ずっと彼の恋人のまま過ごせる。けれども、空の色は藍色から紫色へと変化しつつある。もう時間がない。

そろそろ他の使用人たちが目を覚ます頃だ。

一抹の寂しさを感じつつも、私は彼の腕の力が緩んだタイミングで抜け出した。ベッドの上や床に散らばっている下着を身につけようとしたときに、鏡を見る。

……赤い花びらのように、キスマークが全身に残っているではないか。

気をとられている時間はなかったため、慌ててワンピースとエプロンをつけなおした。

いざ、部屋を飛び出ようとした際に、くぐもったウィリアム様の声が聞こえる。

「イザベラ、行かないでくれ……」

心臓がドキンと跳ねた。

「ウィリアム様、起きて——」

彼の方を見るが、ベッドに横になったまままで目覚めてはいない。

私は一度、眠る彼の元へと戻る。

凜々しい眉に、金色の長い睫毛、長い鼻梁に、弓なりの美しい唇。

部屋を出たら、もう一晩限りの恋人は終わりだ。元の主と使用人の関係に戻らなければならない。たった一晩だったけれど、ひどく幸せだった。

何度も愛おしそうに名を呼んでくれたことを思い出すと、なんだか泣きそうになる。

これで最後。

自分にそう言い聞かせ、そっと彼の唇に自身の唇を重ねた。

「さようなら、ウィリアム様」

後ろ髪を引かれる思いを断ち切り、廊下に誰もいないことを確認してから、部屋を飛び出したのだった。

住み込みの使用人たちの住まいは城館の地下にある。こっそりと自室へ戻ったが、やはり身体は痛くて仕方がなかった。

仕事の支度の時間になり、他の使用人と同じように準備を始める。

しかし、身体の違和感が残ったままで、なかなか普段通りに動くことが出来ない。

「イザベラ、大丈夫？ もし体調が悪いなら、休んだ方が良いわ。今日一日くらいなら、バーバラ様も許してくれるはずよ」

そう言って仲の良い使用人のひとりが、家政婦長に報告してくれたため、一日だけ休みを得ることになった。

自業自得なのに休んでしまつて、皆に申し訳ない。
自ら望んで愛する男性に純潔を捧げたうえに、休むなんて情けないなと思つてしまふ。
ただ、その相手が相手だけに、痛みについて誰にも相談出来ない。
悶々としながら、昼間のベッドの上で休む。

「おい、イザベラ」

突然、聞き慣れたウイリアム様の甘い声が耳に届く。

「部屋に入つて良いか？ 体調が悪いと聞いて、見舞いに来たんだが——」
私は驚いてしまい、どう反応して良いのか分からない。

それに、愛する男性と今ここで顔を合わせてしまうと、婚約が決まるかもしれない彼との最後の情事だと、自分に言い聞かせた気持ちが揺らぎそうで仕方がなかった。

返事が出来ないまま、動けずにいた。

「おい、イザベラ、倒れてるんじゃないだろうな!？」

慌てた様子で、ウイリアム様が勢い良く部屋の扉を開けて入ってくる。

咄嗟に、私は寝たふりをした。ばれないように気をつけて、寝息を立てているように見せかける。

「……なんだ、寝てるだけじゃないか。驚かさなくてくれ」

安堵した様子の彼は、そつとベッドに腰かける。

いつもの爽やかな海の香り以外に、彼から甘い香りがした。

「イザベラ」

優しい手つきで、ウイリアム様は私の長い髪を何度も撫ではじめた。

そうして、ぼつりぼつりと呟く。

「優しいお前は迷惑だと思ふかもしれない。けれど、アイリーン嬢との縁談話を断つたら、改めて俺の気持ちをお前に伝えたいんだ」

心臓が高鳴る。思わず、目を開きそうになった。

「いつもお前にはひどい言い方ばかりしてきたから、すぐには信じてもらえないだろう。だが、一からやり直したいんだ。情けないことに、順番は前後してしまつたけれど」

私が眠っていると信じているからか、いつになく素直な物言いをする主人に少しばかり驚かされる。

「あとは、そうだな。これは昨晚の礼に、たつた今手に入れたんだ」

彼はそう言うと、私の左手を取り、何かしていた。

(たつた今？ 何?)

それから彼は立ち上がると、私の髪を払い、こめかみに口づけてくる。

「イザベラ。次にお前とふたりになれたときに、また」

そうして、彼は私の唇に口づけた。

時間が止まったと錯覚してしまいそうになるほど長いキス。

「イザベラ、俺はお前を思い出にする気はない。俺の幸運を祈ってくれ」

それだけ言い残すと、彼は部屋を去っていった。

ばたんと扉が閉まると、私はそつと目を開ける。

「一晩だけの恋人だつて、言っていたのに……」

彼が何かをしていた左手を、顔の前に掲げる。

金の細いリングに蒼いサファイアが嵌まった指輪が、葉指に輝いていた。

精緻な細工に、どんな女性たちも胸を躍らせるに違いない。

「瞳と同じ色。これは……使用人の私には過ぎたものです、ウィリアム様……」

これは、たった数時間で準備出来るものではない。

昨晚の礼と言うには、持つてくるのが早すぎる。

……アイリーン様とウィリアム様が婚約することに気をとられすぎて、素直じゃない彼のことが見えなくなっていたのだろうか？

それとも、指輪はアイリーン様のために準備していたものだろうか？

期待したら、その分辛くなるのは分かっている。

枕元には、甘やかに香るグラジオラスの赤い花が一輪。

「……結ばれなかったとしても、この優しい主人のそばにずっといたい」

涙が溢れる。

だけど、もしも奇跡が起きて、ウィリアム様の……いいえ、私の願いが叶うのなら……

破瓜の痛みがどこかにいつてしまうほどに、彼の優しさや想いを感じて、幸せな涙が流れ続けたのだった。

第三章 彼の婚約、私の決断

けれども——やはりというべきか、数日後、ウィリアム様はアイリーン侯爵令嬢との婚約が成り立した。

私はしばらく落ち込み、食事も喉を通らなかつた。

だが、残念だという思いと同時に、仕方がないという言葉が強く浮かんだ。

侯爵家よりも家格の低い伯爵家では断れなかつたのだろう。

指輪をいただいた日以来、ウィリアム様とは会っていない。

彼と会いそうなタイミングを私が避けたのもあるが、彼も「おい、イザベラ」といつものようには呼んでこなかつた。

幼い頃から一緒にいたふたりが大人になって、別の人生を歩み始めるのは普通のことだろう。

優しいウィリアム様は思い出にする気はないと言ったけれど、きつといつか恋い焦がれたことが懐しい過去に変わっていくに違いない。

私は彼との思い出を大事にしながら、彼ら夫婦に仕えていこう。

彼が自分に恋していたのかどうか、結局本人の口から聞くことは出来なかつた。

だからこそ、大切な記憶は宝箱にそつとしまふことにする。

そうして時間が経過し、まだ心にしこりは残しつつも、少しずつ前向きに物事を考えるようになっていた。

だが、心以上に身体の不調を感じていた。

気持ちが悪いでいたからだろうか、あまり体調が良くない日々が続いていたのだ。

具合が悪い中、外で洗濯物を干していると、どこからか誰かの声が聞こえる。

石鹸の良い香りが漂い、風にはためくシーツの合間から見えたのは、壮年の男女だった。

こちらからは会話の内容までは聴こえない。

……あれは、アイリーン様のお父様であるテイラー侯爵様と家政婦長のバーバラ様？ どうしておふたりが会話をしているのかしら？

無表情なことが多いバーバラ様が異性——他家のテイラー侯爵と話しているということに、なんとなく違和感を覚える。

「あ……」

ふたりを見ている間に、だんだんと胸やけが強くなる。

吐きそうになるのをなんとかこらえる。

「イザベラ」

そのとき、いつの間にか近くに来ていたバーバラ様に声をかけられた。

もうテイラー侯爵様との会話は終わったのだろう。

先ほどまでふたりが話していた場所に、思わず目を向ける。

すると遠くに、テイラー侯爵様に支えられるアイリーン様の姿が見えた。心なしか、以前に見たときよりも女性らしさが増している気がする。

彼女がそうなったのは、ウィリアム様との婚約が決まったからだろうか？

それとも、最近彼女がよく身につけているふんわりとしたドレスのせいだろうか？

アイリーン様に気をとられる私に向かって、バーバラ様が再び声をかけてきた。

「街へ行って医者にかかりなさい。これは家政婦長としての命令です。私の知り合いの信用出来る人を紹介しますから」

「屋敷の医者ではなく、街の医者ですか？」

彼女は無言で頷き、淡々と告げてくる。

「診断を受けたら、馬鹿なことは考えずに、真っ先に私に報告しに来るように」

「……馬鹿なこと？」

彼女の意図することが理解出来なかったが、私は頷いたのだった。

数時間後、家政婦長バーバラ様が言わんとすることが、医院に行ったあと痛いほどに分かった。

「私は、どうしたら……」

石畳の街を重い足取りで歩く。

なんとか、前へと進んでいるが、足元がおぼつかなかった。

「そんな、たった一夜だったじゃない。そんな……」

医師に告げられた言葉を、頭の中で反芻する。

『妊娠していますね。おめでとございます』

妊娠、妊娠。

ウィリアム様以外に身体を委ねた経験はない。

だからこそ、間違いなく、お腹の子どもは彼の子だと断言出来る。

愛する男性の子を身籠れるなど、喜ばしい出来事のはずだ。大勢の人からも祝福されるべき幸福なこと。

そうだとするのに、素直に喜べない自分がいる。

もう愛してはいけない人の子どもを身籠ってしまったという事実が、重く肩にのしかかってきていた。世界が音を立てて崩れ落ちていくような絶望さえ感じる。

私は孤児だ。いったい両親がどんな人物だったかなんて知る由もない。

だが、何も考えずに子どもを作って、私を捨てたに違いないと、ずっと心の中で思いながら生きてきた。

だから自分は、そのような大人にはなるまいと心に誓っていた。

それなのに、結局、顔もよく知らない両親と同じ状況になってしまったのだ。

生命を、あまりにも軽く考えすぎたのかもしれない。たった一晩で出来るわけがないと。

お腹の子どもに罪はない。

快楽に溺れた自分自身に非がある。

だけど、もう後悔しても遅いのだ。

国教で墮胎は禁じられているので、妊娠した場合、出産するのが通常である。

「私は、どうしたら……」

まとまらない思考のまま、必死に頭を働かせる。

……ウィリアム様の子どもだと、言わなければ良いのでは？

とはいえ、このままブルーム伯爵家で働き続けて、生まれた子どもの容姿が彼そっくりだったら、気づく者も出てくるかもしれない。

そうならば、言い逃れが出来ないだろう。

いくら婚約が決定する前の情事が原因だったとはいえ、もしもウィリアム様に隠し子がいると分かれば、テイラー侯爵家は憤慨するに違いない。

家格が上の貴族に逆らったり、気に障る行動をとったりしたからと、とり潰しに陥られた家の話も耳にしたことがある。

「このままだと、私だけじゃなくて、ウィリアム様やブルーム伯爵家の将来にも関わってきてしまう」

子の父親であるウィリアム様に相談した方が良いだろうか？

けれども、私が妊娠していることを知って、ウィリアム様がどういう反応をするか想像すると怖くてたまらなかった。

輝かしい将来を約束された彼が、私の妊娠に対してどう思うのかが分からない。

悪い想像ばかりが頭をよぎり、焦燥だけが募っていく。はやる気持ちを抑えながら、必死に思考を巡らせる。

「やっぱり、闇医者に頼んで堕ろしてもらって……」

妊婦たちが密かに子を堕ろす場所があると聞いたことがあった。そこまで考えたところで、「涙が溢れてくる。」

「私……人として最低だわ……。子どもに罪はないのに……」

母親の身体に負担がかかる等、やむを得ず墮胎に至ることはあるだろう。だけれども、私の場合、そういった事情ではない。

「……ごめんなさい、弱いお母さんで、ごめんなさい」

一瞬でも、我が子を自分の都合で殺そうとした自身を恥じる。

下腹部に手を当て、必死にまだ見ぬ我が子を思う。

まだ胎動があるわけではない。

けれど、なぜだか無性に、そこにいる生命を愛おしく感じている自分が存在していた。

「自分のことも、ウィリアム様の将来のことも、この子の未来のためにも、私は決めないといけない」

——自分のなかで、もう答えは出てしまっている。決意が揺らがないように、そう口にする。まるで泥沼の中を歩いているかのように、足取りは重かった。

ふらつく足取りで屋敷に帰っていると、一台の豪華な馬車とすれ違う。

……どうしよう。ふらふらしてきた。

なんだかかひどく具合が悪くて、私は石畳の上にもうずくまった。なんとかやり過ぎそうと、体調が戻るのを待つ。

通りすがりの人たちが声をかけてくれたが、なんとか大丈夫だと伝えた。

ちょうどそのとき、先ほど通り過ぎた馬車から慌てて誰かが降りてきた。

その人物の足音が、だんだんとこちらに近づいてくるのが分かる。

「おい、イザベラ」

聞き慣れた声が耳に届いた。

はっとして見上げると、金糸のようなプラチナブロンドの髪に、サファイアを彷彿とさせる蒼い瞳をした青年——ウィリアム様が、そこには立っていたのだ。

「ウィリアム様……」

しばらくの間、まともに会話も交わしていなかった想い人が現れ、夢かと思う。

「おい、イザベラ、どうしてお前は、俺に心配ばかりかけるんだ？」

「きゃっ！」

気づけば彼の逞しい両腕に、横向きに抱き上げられていた。

彼の甘いマスクが眼前にある。海を連想させる爽やかな香りが鼻腔をつき、甘い声音を耳にして、ウィリアム様本人がそこにいるのだと、まさまざと実感する。

老若男女誰をも魅了する美貌の青年の登場に、通りがざわつきはじめた。

「具合が悪いのに、どうして外に出たんだ？」

「それは……」

いくら彼にも関わることはない、妊娠の診断を受けていたのだと、往來で言うわけにもいかない。

「ウィリアム様、目立ちますので、降ろしてはくれませんか？」

周囲の人々の視線をひしひしと感じた私は、ウィリアム様に懇願する。

「ダメだ。具合の悪い人間を放っておくなど、貴族の責務を放棄するのに等しい」

私を抱えたまま、彼は馬車に向かって歩く。

「テイラー侯爵、アイリーン嬢、私の屋敷の使用人が往來にうずくまっています。屋敷に連れ帰ってもよろしいでしょうか？」

ウィリアム様は、屋敷に来ていた彼らの見送りの途中だったようで、私ははっとした。

彼らの邪魔をしてしまったと、罪悪感で胸がいっぱいになる。

馬車の中から、テイラー侯爵様とアイリーン様の声が聞こえる。

「アイリーンが良いと言うのなら、アイリーン？」

「わたしはどちらでも構いません」

婚約が決まって幸せなはずの美しきアイリーン様は、自分の婚約者が他の女性を抱きかかえていても、気に留める様子はなかった。使用人を人として見ない貴族もいるぐらいなので、そのような態度は別におかしくはない。

だが、それ以上に、心ここにあらずといった印象を受けた。

そうして、ウィリアム様と私を置いて、馬車は走り去る。

「ご迷惑をおかけして申し訳ございません、ウィリアム様」

「イザベラ、これに懲りたら無茶はもうやめる」

往來の人々の視線を受けたまま、屋敷へとウィリアム様は歩を進めていった。

私を抱く彼の体温が、ひどく心地よい。

途中、会話がなかったが、彼がぼつりぼつりと語り出す。

「謝罪しなければならぬのは、俺の方だというのに、偉そうだったな……」

長い金の睫毛に縁取られた蒼い瞳がかける。

胸がズキンと痛んだ。アイリーン様との婚約が成立した件に、彼も苦しんでいるのかもしれない。

ふたりの間に、再び沈黙の時間が流れる。

だが、一瞬で穏やかな表情に戻ったウィリアム様は、私に微笑みながら告げてきた。

「最近ずっと、お前のオムレットを食べていないな。体調が良くなってからで良いから、おやつに作ってくれないか？」

その言葉は、私に彼と過ごした日々を思い出させた。

……神様。優しいウィリアム様と離れる前に、最後に一度だけ、彼の好物の卵料理を作っても、

許されるでしょうか？

胸の前でぎゅっと手を握る。

立ち読みサンプル
はここまで

「……はい」

私は眩くらくような小さな声で、返事をした。

「イザベラが作るオムレットが、この世で一番の好物なんだ」

ひどく嬉しそうに笑う、いつになく素直なウィリアム様。

……ウィリアム様との間に出来た子どもを殺すなんて出来ない。

だけど、ウィリアム様の未来を閉ざすような真似もしたくない。

もしも、使用人の仕事を続けながら子どもを育てれば、ウィリアム様だけではなく、周囲にまで彼の子だとバレてしまう危険性が高い。

アイリーン様だって、夫となる人物に隠し子がいたとなれば、そのショックは計り知れないだろう。

彼女の生家であるティラー侯爵家が、面子めんづを潰されたとして動いたとしたら、母子ともに命の危険に晒される恐れさえある。

だからといって、子どもに罪はない。

——だったら、私がブルーム伯爵家を出て、皆がいらないどこか遠くへ行き、金輪際ウィリアム様たちとの縁を断ち切ってしまえば良い。

父親がいらない分、子どもは私がしつかりと愛情をかけて育ててみせる。

愛する人の姿を目に焼き付けようと、屋敷に帰るまでの間、ずっと彼の横顔を見つめて過ごしたのだった。

屋敷に帰り着き、体調が少し落ち着いた私はさっそく、ウィリアム様の好物を作ることにする。コックと話し、厨房を借りて、ふわふわのオムレットを焼いた。

まだ熱々の菓子を、蕙模つたも様で縁取られた白磁はくじの皿に載せて、ウィリアム様の自室へと向かう。

部屋の扉を開くと、彼が待ち構えていた。

室内に甘い香りが漂う。

私が持つオムレットを見た途端、ウィリアム様は目を爛爛らんらんと輝かせる。

その姿は、子どもの頃から変わらない。

彼との思い出が、ひどく懐かしく感じられた。もうこれでこの人にオムレットを作ることはないのだと思うと、寂寥感せきりょうかんが胸を襲ってくる。

普段は礼儀正しいウィリアム様だが、今は子どものように大層幸せそうな表情で頬張ほおっていた。

「おい、イザベラ、体調はもう良いのか？ 俺がオムレットを食べたいと言ったから、無理して作ったんじゃないだろうな？」

言い方こそ偉そうだが、私のことを心配しているのが伝わってくる。

「はい。医者に診てもらいましたが、病気ではありませんでしたので……」

そう、病気ではない。

確かに私の身体は通常とは異なるが、それは妊娠しているからだ。

「病気でないなら良かった」